

社会調査方法論の再検討

——異文化理解と文化人類学のディスコース——

阿久津昌三

- 一 はじめに
- 二 異文化理解と〈他者〉
- 三 ファイルドワークとエスノクラフイー
- 四 エスノクラフイーの読み方／書き方

一 はじめに

現代世界は、東西冷戦構造の崩壊以降、グローバル化の進展とともに、異文化摩擦あるいは異文化間の衝突、地域紛争など異文化と異文化とが出会い、その間に摩擦が生じたり、きしみを起こしたりする現象などのさまざまな問題群が浮き彫りになっている。

現代世界における移民の移動に関するS・カースルとM・J・ミラーの国際比較の調査によると「移民のグロ

「グローバル化」「移民の加速化」「移民の多様化」「移民の女性化」という一般的な傾向がみられるという。今後世界は、これらの「国際移民の時代」とも呼ぶべき状況のなかで、移民の供給地と定住地との間の国境を越える移住者のコミュニティ、すなわちトランスナショナル・コミュニティが形成されることで、さらにこのような傾向が強化されると予測されている。⁽¹⁾ グローバル化とは、関根政美、青木保を参照しながら定義すると、世界諸地域の間を結ぶ情報通信・運輸交通手段が急速に発展し、地球上の空間的・時間的距離が縮小し、資本、商品、サービス、人間、情報、文化、技術などの国境を越えた移動や交流や伝播が活発化し、世界の諸地域あるいは各国間の相互交流や依存関係が強まる現象のことである。⁽⁴⁾

二〇〇〇年一月に発表された「二一世紀日本の構想」懇談会の最終報告書のなかでも、日本に「変革を強いる世界の潮流」として「グローバル化」「グローバル・リテラシー(国際対話能力)」「情報技術革命」「科学技術」「少子高齢化」をとりあげているが、このような潮流のなかで、現代日本における異文化理解の在り方も問い直されている。⁽⁵⁾

本稿では、異文化共存・共生の教育をいかに実現するのかという処方箋として、文化人類学の観点から、フィールドワークの方法とエスノグラフィーの読み方・書き方を学ぶことが、いかに現代世界における錯綜したさまざまな問題群を解決するためにも、また、「臨床の知」としての「異文化間リテラシー」を育成するためにも重要であるかを論じることが目的である。

(1) S・カースル/M・J・ミラー『国際移民の時代』(関根政美・関根薫訳)(名古屋大学出版会、一九九六年)。

(2) 関根政美『多文化主義社会の到来』(朝日新聞社、二〇〇〇年)、七―八頁。

(3) 青木保『多文化世界』(岩波書店、二〇〇三年)。

(4) 青木保は、『異文化理解』（岩波書店、二〇〇一年）において、IT化、グローバル化の進展とともに、異文化理解と他者認識と同時に、自文化と自己について異文化と他者に理解してもらうという理解と認識の相互行為の必要性を論じている。

青木は異文化理解のための「テキスト」として映画をとりあげている。例えば、『インドへの道』（一九八四年）、『王様と私』（一九五六年）及び『アンナと王様』（一九九九年）、大英帝国の植民地香港を舞台にした『慕情』（一九五五年）、007シリーズの最初の作品『ドクター・ノオ』（一九六二年）と同じシリーズの『ロシアより愛を込めて』（一九六三年）、黒澤明監督の『七人の侍』（一九五四年）、バブル最盛期の日本経済と大企業を攻撃対象とした『ライジング・サン』（一九九三年）、東欧系の冷酷無情の殺し屋を描いた『15ミニッツ』（二〇〇一年）、香港の監督がつくった『ラブソング』（一九九六年）、北野武監督の『HANA-BI』（一九九八年）、『BROTHER』（二〇〇一年）などの映画を教材化すれば、異文化に対する視線、偏見と先入観、ステレオタイプ、オリエンタリズム、デイアスポラなどの概念を理解する素材となるであろう。また、映画が国民国家、ナショナルリズムをどのように形成したのかを論じたものには、ジャン＝ミシェル・フロドン『映画と国民国家』（野崎敏訳）（岩波書店、二〇〇二年）などがある。

(5) 関根政美『多文化主義社会の到来』（前掲書）三―六頁。関根政美は「日本も何らかの積極的な移民政策をもち、外国からの人の移住を進めなければならないグローバル化の時代に入った」という認識にたつて、グローバルゼーションとは何か、グローバルゼーションがなぜ世界の国民国家の多文化化・多民族化を促進するのか、そのプロセスを明らかにするとともに、オーストラリアの事例をとりあげて、多文化主義の可能性と限界を検証している。二一世紀の日本を構想するためにも「多文化主義」というモデルをいかに導入するかどうかが問われている。

二 異文化理解と〈他者〉

太田好信は、『トランスポジションの思想―文化人類学の再想像』のなかで、社会科学のなかで異文化理解に

最も関与してきた文化人類学の責務について次のように述べている。

「文化人類学では、異文化についてなにがしかの理解に到達したという喜びは、長く続かないことが多い。なぜなら、『理解』それ自体が、『誤解』である可能性を、つねに無視できないからだ。」⁽¹⁾

「もし理解に成功すれば、それは研究者側の文化概念を押しつけた結果達成されたことになり、むしろそのような理解は研究者側の文化的制約を暴露することになる。反対に、異文化理解に失敗したという告白は、学問としていまだに成り立っていないことを示してしまう。」⁽²⁾

これらの事例をあげれば、アフリカにおける政治システムを「理解」する時に、ヌエル (Nuer) の民族誌をモデルとした、エヴァンス・プリチャードのシステム理論を人類学では踏襲してきたという事実をあげることができるだろう。ヌエルの民族誌の政治システムというモデルの「神話」は、スーダンでの民族紛争のメカニズムを調査したハチンソンの報告でもろくも否定された。⁽³⁾ いまではイギリス統治下での民族の機能構造論的「理解」が、民族の生成と深く結びついていたという歴史的な事実が問い直されている。歴史的な事実を問い直すことは、「誤解」の修復作業としての文化人類学の再構築につながっている。⁽⁴⁾ これは、社会科学の方法、特に、社会調査方法論の再構築でもある。

文化人類学の理論的実践―特に、異文化理解の方法と実践を問い直す作業は、例えば、青木保の『文化の翻訳』(一九七八年)のような、エヴァンス・プリチャード、フォータス、リーチなどの人類学者の言説を媒介として、異文化理解の方法を解説したテキストが出版された時期と比べると格段に進んでいる。⁽⁵⁾ 文化人類学は、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーの編集による『創られた伝統』(一九八三年)⁽⁶⁾ によって、「伝統」と「近代」という二項対立関係を揺るがす衝撃を受けた。それは、いかに伝統、伝統的なものが近代の言説装置のなかで政治的な意図によって創られたものであるのかを暴露している。また、その衝撃が最も強かったのは、一

九八〇年代後半から一九九〇年代初期にかけて、『オリエンタリズム』以降隆盛してきた「ポストコロニアル理論」と呼ばれる「異文化理解のメタ理論」と「エスノグラフィイ」を書くという行為⁽⁷⁾を問い直す作業を行なったクリフォードとマールカスの編集による『文化を書く』(一九八六年)⁽⁸⁾のエスノグラフィイ批判である。この事例として、太田好信は、アメリカ社会では「文化」という概念が「文化人類学者たちの手を離れて、さまざまなマイノリティの運動(アフリカ系アメリカ人、チカノ、アメリカ先住民、フェミニスト、同性愛者らの運動)について語る際にも不可欠な概念になっている」ことを示唆している。「文化」の概念が、文化人類学の基礎概念として重要な度の高い専門用語でありながら、「文化」とは何かという定義が論争の対象となっている現実がある。つまり、「文化を語る権利は誰にあるのか」ということである。スパイク・リー監督の映画『マルコムX』などの事例をとりあげ、「ある集団に帰属しない外部の人間に、その集団について語る権利はあるのだろうか」という太田の疑問は、いわゆる「異文化」を内在的に理解し、その文化を語る学問としての文化人類学に対する厳しい自己批判を迫る結果となっている⁽⁹⁾。

最近の文化人類学では、隣接諸学問のなかでも「異文化理解」を専売特許としてきた人類学の在り方——特に、「かれら」と「われわれ」との関係——を問い直す作業が進んでいる。文化人類学は隣接諸学問のなかでも「異文化」を研究する代表的な学問であるとされてきたし、また、そのように思われてきた。その場合、「異文化」とは「自己と異なる他者の文化」のことであり、他の文化とは「異なっている」自文化を前提としてその自文化の内部で自己同一性(アイデンティティ)を保持すること、言い換えれば、「自と他は互いを、異なるものと位置づける一方で、自己が所属する社会内部は均質的な空間として構想する」⁽¹⁰⁾ことで、「自文化」と「他文化」との相互理解のなかで異文化理解を実践しようとする「文化相対主義」という立場をとってきた。この文化人類学の自己批判のひとつが「文化相対主義」が内包する問題群である。

ここでは、「文化相対主義」の言説として、アメリカの代表的な文化人類学者クライド・クラックホーンの『人間のための鏡』（一九四九年）とルース・ベネディクトの『菊と刀』（一九四六年）のテキストからその言説の一部を引用してみよう。

「未開人を研究すると、われわれ自身がよりよく理解できるようになる。通常はわれわれは、自分が特殊なレンズを通して人間の生活を見ていることに気づかない。丁度、魚が水の存在に気がつかないようなものである。同様に、自分の生活している社会の地平から抜け出したことのない研究者には、自分自身の思考を作り上げている習慣に気がつくことはとても望めない。人間を研究する者は、その対象ばかりでなく見る目についても知らねばならない。人類学は、人間に対してある大きな鏡をかかげて、人間自身に、その変幻きわまりない姿を見せようとするものである⁽¹¹⁾。

「日本について書く日本人は、本当に重要な事柄を、それが彼にとつて、彼が呼吸する空気とおなじように慣れきった事柄であり、眼につかない事柄であるため、見のがしてしま⁽¹²⁾……国民（日本人）が自らの世界観を分析することに期待をかけるわけにはいかない」。

これらの著名な文化人類学者を引用したのは、「文化相対主義」が内包する問題群を提示するためであった。クラックホーンの言説には、マーガレット・ミードの『サモアの思春期』（一九二八年）と同様に、異文化（other culture）を理解することは「鏡」としての人類学を媒介として自文化（our culture）を理解することであるという論理を読みとることができる。また、ベネディクトの言説には「他者の客観性」という論理を読みとることができる。文化相対主義とは「異なる文化をもつ人々は、異なる世界に住む、異なる概念体系をもつ、経験を異なる仕方で組織している⁽¹³⁾」と定義されているが、その論理的な帰結は「異文化理解は不可能である⁽¹⁴⁾」ということになりかねない。

これは、次のような酒井直樹による社会学者ハーバーマスの「西洋なる仮想された同一性」批判とも共通する

ものである。

「一方で西洋を眼に見えるものとする鏡としての非西洋が必要であると認めながらも、他方でそのようにして報告者によって提供された非西洋文化の鏡が実は曇りをもったものであるかどうかはまったく問わないのである。彼のもとに届けられた鏡は、民俗学者や人類学者の異国趣味の産物にすぎないのかもしれないのだ。……ハーバーマスにとって、共同可能性 (incommensurability) はせいぜい文化相対主義という、それ自身がニセの問題を意味するにすぎないものである」⁽¹⁵⁾。

山下晋司も「文化人類学の目的は、異文化を理解することである、といわれてきた」と前置きをして、文化人類学の歴史のなかで、異文化とは「未開」とか「野蛮」とか「伝統的な」と呼ばれる社会の文化のことであったが、最近の文化人類学では「へかれら」を西洋の文化人類学者が代弁する時代は終わり、文化人類学者が書くこととの代表性 (representation) が問われるようになっていく」として、文化人類学におけるパラダイムの再定義を提唱している⁽¹⁶⁾。interpretation が「解釈」(ウエーバーの意味では「理解」verstehen) を意味するならば、文化人類学者がある特定の国、地域、民族などの社会や文化について、「解釈」「理解」するという represent する権利があるのかどうかという根本的な問題がある。それは、「表象」としてのテキスト(エスノグラフィ)を作成して、自らを代表 (represent) することができない人々に代わって、文化人類学者がある特定の社会や文化について代表して語るという行為の政治性の問題でもある⁽¹⁷⁾。異文化を内在的に理解し、その文化を語る学問としての文化人類学に対する自己批判は「文化相対主義の代価」なのかもしれない。山下晋司は、これらの議論をも踏まえて、文化人類学のパラダイムを再定義する必要性を次のように提唱している。

「(文化人類学のパラダイムの) 再定義は、……変わりつつある世界とのかかわりにおいて行われる必要がある。そしてこの現実の変化に対応して、かつての研究課題を再検討し、新しい研究領域と研究方法を開発していかねばならない。

そうしながら、文化人類学を「かかれら」ばかりでなく、「われわれ」も含んだ生成する現代世界についての学として鍛えなおしていかなければならないのである⁽¹⁸⁾。

山下晋司は、グローバル化、ボーダーレス化が進む移動の時代のなかで、「グローバル・エスノスケープ」——地球上を流動する人々——観光客、移民、難民、亡命者、外国人労働者など——によって織りなされる風景、「グローバル・メランジエ」(地球規模の異種混濁)、「グローカリゼーション」(グローバル化とローカル化とを組合せた言葉⁽¹⁹⁾)など、文化の脱地域化と地域化のなかで生成される文化をエスノグラフィイとしていかに記述していかなければならないかを提唱している。このような流れのなかで、文化人類学は現代世界が直面する諸問題——開発、民族問題、ジェンダーなどに「参与観察」を通して取り組んでいくと同時に、「環境」「開発」「医療」「エンダー」などの具体的に解決を迫られる課題に対しても実践的に関与していくことが求められていると主張する⁽²⁰⁾。しかし、「世界システム」「植民地主義」「開発」「観光」「民族紛争」「難民」「ジェンダー」「医療」「身体」「グローバル・カルチャー」「老齡化」「文化帝国主義」などの新たな研究課題が登場しているが、「親族」「交換」「儀礼」「神話」「象徴」などの研究課題も文化人類学にとって基礎的な学問領域であることには変わりない。では、このようなパラダイムの再定義のなかで、文化人類学ではフィールドワークとエスノグラフィイの在り方はどのように問われているのだろうか。

- (1) 太田好信『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像』(世界思想社、一九九八年)一四四頁。
- (2) 太田好信『トランスポジションの思想』(前掲書)一四七頁。
- (3) Sharon E. Hutchinson, *Nier Dilemmas: Coping with Money, War, the State*, Berkeley: University of California Press, 1996.
- (4) 「民族」概念の再構築は、川田順造・福井勝義編『民族とは何か』(岩波書店、一九八八年)、スチュアート・ヘ

- ンリ『民族幻想論―あいまいな民族、つくられた人種』（解放出版社、二〇〇二年）などがある。
- (5) 青木保『文化の翻訳』（東京大学出版会、一九七八年）。青木保は「文化翻訳者の使命―現代人類学の問題状況」というエッセイのなかで、「二〇世紀の最後の四半期に入って、人類学はようやくわが国においても、どうにか学問的定席をもてることができるようになった観がある」（『UP』一九七五年一〇月号）と述べている。日本の社会科学において文化人類学が「異文化理解についてなにかの理解に到達した」という喜びを感受している印象を受ける。
- (6) E. Hobsbawm and T. Ranger(eds.), *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983（『創られた伝統』（前川啓治・梶原景昭ほか訳）紀伊國屋書店、一九九二年）。
- (7) J. Clifford and G. Marcus(eds.), *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press, 1986（『文化を書く』（春日直樹ほか訳）紀伊國屋書店、一九九六年）。
- (8) 太田好信「アメリカ合衆国の文化人類学」（船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、一九九八年）九六頁。川田順造は「現在では『文化人類学』から『人類』が次第に影を薄くしつつあるようにみえる東京大学の後期課程と大学院で、過去のある時期私が学んだ名称であった『文化人類学』から、私が目指すものでは逆に、『文化』をとってしまいたいのだ」「文化人類学と呼ぶことはそれなりに妥当だ。ただそう呼んだとしても、私にとって大切なのは文化『人類学』であって、『人類』の抜けた『文化学』ではない」という意見もある。これは傾聴に値する意見である（川田順造「メタサイエンス、そしてマイナーサイエンス」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、一九九八年、五二―五三頁）。
- (9) 太田好信『民族誌的近代の介入―文化を語る権利は誰にあるのか』（人文書院、二〇〇一年）。太田好信「アメリカ合衆国の文化人類学」（前掲書）九七―九八頁。
- (10) 太田好信「アメリカ合衆国の文化人類学」（前掲書）九八―九九頁。また、George W. Stocking, Jr., *After Tylor: British Social Anthropology, 1888-1951*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1995.
- (11) C・クラックホーン『文化人類学の世界』（外山滋比古・金丸由雄訳）（講談社、一九七一年）二六頁。
- (12) R・ベネディクト『菊と刀』（長谷川松治訳）（社会思想社、一九六七年）二〇頁。Clifford Geertz, 'Us/Not-Us: Benedict's Travels,' (in) Clifford Geertz, *Works and Lives: The Anthropologist as Author*, Stanford:

Stanford University Press, 1988, pp. 102-128.

- (13) 浜本満「文化相対主義の代価」(『理想』第六二七号、一九八五年)一一三頁。
- (14) 渡辺公三は、文化相対主義が内包する問題群に対する危惧について、次のように語っている。「筆者は『鏡としての人類学』という比喩は、戦後の文脈のなかで形成された、人類学のもっとも新しい現代的《創設神話》の表現だと考えている。ラカンをもじっていえば『民族誌的〈私〉』を形成するものとしての鏡像段階』に戦後の人類学が達したということだろう。この楽天的な鏡像とフアンソンのある切迫感を帯びた鏡像の隔たりが、人類学そのものの楽天的な思考態度を象徴するものではないことを願わずはいられない」(「人種あるいは差異としての身体」『岩波講座 文化人類学 第五巻 民族の生成と論理』岩波書店、一九九七年)六〇頁。また、清水昭俊は「欧米の人類学が自己自身への関心を拡大させつつあるのとは対照的に、日本の人類学はむしろ『異文化』に対して旺盛な関心を展開させており、各国の人類学の中でも、『異文化』研究を最もよく実践している人類学になりつつある」と評価している(「日本の人類学」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、一九九八年、一二四頁)。しかしながら、日本の人類学も、山下晋司が摸索するように、日本経済の停滞とともに、グローバル化のなかでの日本自体に調査対象をもとめている。「何のための学問」なのかは問われてしかるべきだろう。
- (15) 酒井直樹「死産される日本語・日本人―「日本」の歴史・地政的配置」(新曜社、一九九六年)七一―八頁。
- (16) 山下晋司「文化人類学をヴァージョンアップする」(船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、一九九八年)一三六頁。
- (17) 太田好信『民族誌的近代の介入』(前掲書)。
- (18) 山下晋司「文化人類学をヴァージョンアップする」(前掲書)一四二―一四九頁。
- (19) Arijun Appadurai, 'Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology,' (in) R. G. Fox(ed.), *Recapturing Anthropology*, Santa Fe: School of American Research Press, pp. 191-210; Jan Nederveen Pieterse, 'Globalization as Hybridization,' (in) M. Featherstone et al. (eds.), *Global Modernities*, London: Sage Publications, pp. 25-68; Ronald Robertson, 'Glocalization: Time-Space and Homogeneity-Heterogeneity,' (in) M. Featherstone et al. (eds.), *Global Modernities*, London: Sage Publications, pp. 25-44.

(20) 山下晋司「文化人類学をヴァージョンアップする」(前掲書)一四七—一四九頁。

三 フィールドワークとエスノグラフィ

社会調査の方法を語ることは社会科学を専門とする研究者にとって至難の技であり自己の内省的考察の対象となるだけに最も切実で難解なものである。二〇〇一年度の第七四回日本社会学会大会(於・一橋大学)では、社会調査の困難をめぐって、二つのシンポジウム「社会学の中の社会調査」と「社会の中の社会調査」が開催された。⁽¹⁾また、二〇〇三年度の第三七回日本民族学会(於・京都文教大学)でも「『文化の窮状』の未来」と題する分科会が開催された。⁽²⁾ここでは、フィールドワークとエスノグラフィにおける「書き手」の役割とは何かを問題にしているジエームズ・クリフォードをとりあげてみよう。

「もしエスノグラフィが徹底的な調査研究の経験を通して文化の解釈を呈示するものだとするれば、このような手に負えない経験を、一体どのようにして権威ある書かれた物語に変えるのであろうか。異文化との出会いとは、騒々しい、思い込みの激しいものだ。多かれ少なかれ別個の『異文化』に関する適切な一つの解釈として、さまざまに練引きされた力関係や個人的な思惑の食い違いに彩られたそうした出会いは、正確なところ、一体どのようにして一人の書き手によって書き上げられるのだろうか?」⁽³⁾

「エスノグラフィを書くという行為」を問い直す「ライティング・カルチャー」ショック以降、文化人類学の世界ではフィールドワークにもとづく社会調査方法が問い直されている。フィールドワークとエスノグラフィを支えてきた表象(representation)の政治力学を暴露し解体するという作業である。

文化人類学では、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者たち』の民族誌は、フィールドワークにもとづく

社会調査法を学ぶうえでのバイブル的存在であった。しかしながら、民族誌家が「原住民の本当の心、部族生活の本当の姿」を描写し記述する技法を ethnographer's magic と呼んだが、「ライティング・カルチャー」では、この ethnographer's magicこそが表象作用の政治力学そのものであると批判の対象となったのである。

松田素二は「フィールドワークは受難の時代を迎えている。手を替え品を替えたフィールドワーク叩きが行われているからである。そしてその批判は、けっこの的を射たものなのだ」と書いているが、文化人類学では「フィールドワーク再考」は現実的な問題となっている。フィールドワークが調査者の「主観」にもとづくものであり、きわめて「恣意的なもの」であるという批判もあれば、「調査する者」と「調査される者」との関係性についての批判などもある。松田はこれらを「袋小路のフィールドワーク」「フィールドワーク受難の時代」と呼んでいるが、これらの批判を受けて、どのように打開するかが文化人類学の最も重要な課題である。その問題とは、太田好信も示唆しているように、文化相対主義が内包する問題群とも密接に関係していることであるが、エスノグラフィー（民族誌）を書くことに関する根源的な懐疑が根底にある。松田素二は「民族誌の行き詰まり」と題して次のように語っている。

「民族誌のなかでは、調査される人々はつねに『彼ら』とか『××族』というように一括りにされてきた。それに対して調査する側の『私』については、いっさい対象化されることはなかった。つまり民族誌は『彼ら』が何者であるかを語るだけであって、その語り手である『私』が何者であるかについてはずつと沈黙してきたのである。じつさいのところ長い間民族誌は、調査する者とされる者との生についての、みごとなまでに手前勝手な対比から作り出されてきたと言つてよい。その対比とは、単純で一般化が可能な『彼ら』と、複雑でユニークな『私』というものだ。『私』は特殊で一般化が不可能なゆえに分析の対象から外されてきた。こうして『特殊な私』が『一般的な彼ら』を描くという不平等で固定的な構造が、民族誌のスタイルとして定着していったのである」。

- (1) シンポジウムの内容は「特集 社会調査―その困難をこえて」(『社会学評論』(第五三卷第四号、二〇〇三年)として論文の形式でも発表されている。「社会調査の困難」(櫻井厚)、「地方自治体が実施する社会調査の深刻な問題」(大谷信介)、「計量的モノグラフと数理―計量社会学の距離」(吉川徹)、「フィールド調査法の窮状を超えて」(松田素二)、「『社会調査ハンドブック』の方法史的解説」(佐藤健二)、「サーベイ調査の困難と社会学の課題」(玉野和志)、「米国より見た社会調査の困難」(山口一男)、「市民調査という可能性」(宮内泰介)、「相互行為過程としての社会調査」(山田富秋)、「女性に対する暴力」と調査研究」(内藤和美)。
- (2) 分科会の内容は「どうして、いまごろ『文化の窮状』か?」(太田好信)、「水子供養言説を解体(アンメイク)する―第一世界のフェミニスト宗教学批判」(川橋範子)、「転回するフィールドワークの口頭性」(慶田勝彦)、「芸術・文化の殿堂からコンタクト・ゾーンへ」(吉田憲司)。James Clifford, *The Predicament of Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- (3) Clifford, Clifford and Marcus(eds.), *ibid.*, p. 123.
- (4) George W. Stocking, Jr., *The Ethnographer's Magic and Other Essays in the History of Anthropology*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1992.
- (5) 松田素二「フィールドワークをしよう・民族誌を書こう」(船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房、一九九八年)一五八一―一五九頁。
- (6) 松田素二「フィールドワークをしよう・民族誌を書こう」(前掲書)一六〇一―一六一頁。
- (7) 松田素二「フィールドワークをしよう・民族誌を書こう」(前掲書)一六二一―一六三頁。

四 エスノグラフィの読み方／書き方

フィールドワークの方法とエスノグラフィを書くことに関する根源的な懐疑、批判を受けて、文化人類学で

は、調査される側に対して三人称複数の「彼ら」の使用をやめて、特定の個人についてのみ語るというスタイルをとる民族誌、また、「私」という一人称を主語として語るというスタイルをとった民族誌が出版されるようになった。⁽¹⁾ 富永國子の『人類学的出会いの発見』(一九九四年)は「自己」と「他者」との間で、主体と客体の断絶を味わいながら「私」という一人称で書かれた民族誌(「人類学入門のための入門書」としての民族誌)である。⁽²⁾ また、中川敏は、イギリスの社会人類学者エヴァンス・プリチャードの語りを引用して、犬好き派の人類学者と猫好き派の人類学者というカテゴリーに分けて「犬(事実)好きの人類学者は理論を無視し、猫(理論)好きの人類学者は事実を無視する」と述べて、犬好き派のための人類学入門書『交換の民族誌』(一九九二年)⁽³⁾と猫好き派のための人類学入門書『異文化の語り方』(一九九二年)⁽⁴⁾を執筆している。

船曳建夫・山下晋司編『文化人類学キーワード』(一九九七年)⁽⁵⁾の「参考文献一覧」にも文化人類学における主要な日本語で読めるエスノグラフィが掲げられているが、松田素二・川田牧人編『エスノグラフィ・ガイドブック』(二〇〇二年)⁽⁶⁾はエスノグラフィの文献解題の形式をとっている。編著者は「エスノグラフィという世界を俯瞰する軽便な目録」を提示することで「エスノグラフィを活用したくとも何から読み、どう学んだらよいのか分からない」という若い高校生や大学生たちの水先案内となり、他分野の研究者たちにエスノグラフィの視点と技法を有効に活用してもらうための羅針盤となる「エスノグラフィをひらく」ための仕掛けになればと述べている。その仕掛けとして、(1) 読者が書物としてのエスノグラフィを、実際にひらいて読むことができるためにということ、(2) エスノグラフィの視点や方法を、他分野に対してひらかれたものにする、(3) 一般的には必ずしもエスノグラフィに分類されないものもエスノグラフィとして扱うこと、をあげている。エスノグラフィ・ガイドブックの文献解題は、「西太平洋の遠洋航海者」「悲しき熱帯」「ヌア一族」「菊と刀」などの古典的な欧米の民族誌から、日本のエスノグラフィを築きあげた人類学者たちの「テ

ソの民族誌」「無文字社会の歴史」「アフリカの小さな町から」などを経て、「女子プロレスの民俗誌」「一瞬の夏」「暴走族のエスノグラフィ」などの新しいジャンルまでに及んでいる。日本における異文化間教育の在り方も「奇抜なファッションで新しい日本語を操る若者文化」「永田町でしか通用しない理屈で行動する政治家の行動」など〈外部〉の人間から見た「異文化」の世界、「フィリピン(7)の漁村で養殖されたエビが、日本のファミリーストランで消費されたり、タイの農村で飼育加工されたニワトリが、日本の焼鳥屋で提供される」といった異文化共存・共生の現実を解説するために、エスノグラフィの視点や方法を学ぶ必要があるだろう。

「異文化」とは必ずしも海外の諸社会についてだけでなく、「自文化」のなかでも〈自己〉が十分に知らないどのような〈他者〉の世界も「異文化」社会であるとみなす視点が必要である。このような視点で編集されたものに、住原則也・箭内匡・芹澤知広『異文化の学びかた・描きかた』(二〇〇一年)がある。異文化理解、国際教育理解を学ぼうとする学生たちの教材としてきわめて適切なテキストとなるであろう。これらの異文化理解の基礎的な作業を終えて、文学、ルポルタージュ等を含めたエスノグラフィを読めば、異文化をいかに学び、いかに解説したらいいのか、いかに書いたらいいのかを理解することができる(8)。

社会学の領域で最も優れたエスノグラフィ案内に『暴走族のエスノグラフィ』(一九八四年)という著書をもつ佐藤郁也『フィールドワーク』(一九九二年)、『フィールドワークの技法』(二〇〇二年)がある(9)。

本稿では、最初に、文化人類学における異文化理解の方法と実践を問い直す作業をとりあげて、次に、異文化理解と〈他者〉との関係性、フィールドワークとエスノグラフィ、エスノグラフィの読み方・書き方に関する文献案内を呈示した。エスノグラフィを読んだり、書いたりするという作業は、複雑な社会的現実を理解するための知識の習得や知識を再構成する力(多元的な力)、よりよい人間関係をつくり出す力(相互作用的な知)、他者とのかわり方で問題群を解決する力(参与的な力)などを育成する「異文化間リテラシー」(10)を育成するため

にきわめて重要である。フィールドワークとエスノグラフィは「異文化間リテラシー」を学ぶ「臨床の知」にほかならない。

- (1) 松田素二「フィールドワークをしよう・民族誌を書く」(前掲書) 一六二頁。日本の人類学で定評のあるフィールドワーク入門には、川喜田二郎・岩田慶治『人類学的宇宙観』(講談社、一九七五年)、岩田慶治『創造人類学入門』(小学館、一九八二年)があるが、人類学のジャンルではないが、現代アラブ文学、第三世界のフェミニズム論を展開している岡真理の『彼女の「正しい」名前は何かー第三世界のフェミニズムの思想』(青土社、二〇〇〇年)、『記憶/物語』(岩波書店、二〇〇〇年)も「私」という一人称として語る作品である。
- (2) 富永國子『人類学的出会いの発見』(世界思想社、一九九四年)。
- (3) 中川敏『交換の民族誌ーあるいは犬好きのための人類学入門』(世界思想社、一九九二年)。
- (4) 中川敏『異文化の語り方ーあるいは猫好きのための人類学入門』(世界思想社、一九九二年)。
- (5) 船曳建夫・山下晋司編『文化人類学キーワード』(有斐閣、一九九七年)。
- (6) 松田素二・川田牧人編『エスノグラフィー・ガイドブックー現代世界を複眼でみる』(嵯峨野書院、二〇〇二年)。
- (7) 松田素二・川田牧人編『エスノグラフィー・ガイドブック』(前掲書) 一七ー一八頁。
- (8) 住原則也・箭内匡・芹澤知広『異文化の学びかた・描きかたーなぜ、どのように研究するか』(世界思想社、二〇〇一年)。また、山口修・齋藤和枝編『比較文化論ー異文化の理解』(世界思想社、一九九五年)は、言語、音楽、遊び、芸能、宗教、都市、女性史等のさまざまな視点から異文化理解の理論と方法を提示している。
- (9) 佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー』(新曜社、一九八四年)、『フィールドワークー書をもつて街に出よう』(新曜社、一九九二年)、『フィールドワークの技法』(新曜社、二〇〇二年)。また、今田高俊編『社会学研究法ーリァリティの捉え方』(有斐閣、二〇〇二年)は従来の「社会調査論」「社会調査の方法」「社会調査ハンドブック」などの形式と異なった、「フィールドワークの受難の時代」に対応したエスノグラフィー案内である。
- (10) 佐藤郡衛『国際理解教育ー多文化共生社会の学校づくり』(明石書店、二〇〇一年)。

(追記)

本稿は、平成十五年科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「多文化主義と多文化教育の理論と実践に関する臨床教育的研究―国際理解教育における英語教育学と文化人類学との対話」(課題番号1520351)の研究成果の一部である。